

藤原道長の摺本文選

池 田 昌 広

はじめに

摂関時代の代表的政治家、藤原道長（九六六—一〇二七）は大蔵書家でもあった。その熱心な蒐集ぶりは、かれの日記『御堂閔白記』に散見する和漢書の記事より知られる。道長の蔵書は少なからず漢籍をふくんだが、そのうちには「摺本」の語で表された印刷本があった。道長の「摺本」所蔵をおしえるのは、同記のつぎの二条である。

A 次御送物、摺本注文選・同文集、入蒔絵宮一双、袋象眼包、五葉枝、事了御入。

（寛弘七年十一月二十八日）^①

B 入唐寂昭弟子念救入京後初来、志摺本文集并天台山図等。

（長和二年九月十四日）

Aは道長から一条天皇への献物のリスト、Bは入宋僧寂照から道長への書籍進呈の記事である。「注文選」は附注本『文選』、「文集」は『白氏文集』をいう。漢籍外典の和刻は鎌倉時代にはじまると考えられ、なにより日本で書籍印刷が十一世紀に創業したことを勘案すれば、これら『文選』と『白氏文集』との印刷地は中国と断ぜられる。^③

道長の時代は中国では北宋初期にあたる。五代にはじめて儒教經典が印刷され、ようよう仏典と実用書以外の一一般の書籍も印刷されはじめたとはいえ、刊本の絶対量はなお少なく流通範囲はきわめて限られていた。道長の「摺

本」入手は、仏經をのぞいて中国刊本舶載の最早の一例であり、また当時における刊本の稀少性からも注目にあたいする。

A B 兩条への注視はこれまでも多かつた。ただ、それら言及の筆は往々にして宋本舶載の例証として引挙するにとどまる憾みがあつた。A B の「摺本」それ自体が直接の研究対象になつたことはなかつたように思われる。

小論は、A の「摺本注文選」がいかなるテキストであつたかを究明しようとするものである。A B の『白氏文集』については別に論じた。⁽⁴⁾ また『文選』の初期印刷史についても私見を述べる。行論の次第はこうだ。まず北宋初期以前の中国における『文選』の印刷史を整理する。その結果、数種の刊本が道長藏本の候補にあがるはずである。ついで、それら候補のうち道長の手にしたテキストとしていづれが妥当か比定をもくろむ。比定にあたり印刷史のみからの検討には限界があるけれど、当時の国際交易また撰録家をふくむ日本仏教界の動向を加味することで蓋然性の高い比定が可能になるはずである。

一 母昭裔本と北宋国子監初修本

最初にわれわれが知らねばならないのは、中国における『文選』の印刷史である。A を記した寛弘七年（一〇一〇）は北宋の大中祥符三年にあたるから、必要な知識はこの年以前の『文選』の印刷史ということになる。

そのころ以前の『文選』の刊刻は、いちおう左記の二本をかぞえることができる。⁽⁵⁾

(一) 後蜀母昭裔刊五臣注本（九四〇年ごろ～九五〇年代）。

(二) 北宋国子監初修李善注本（一〇〇七～一〇一一年）。

(一) は後蜀の宰相であつた母昭裔の家刻本である。昭裔による刊刻は『文選』のほか『初学記』『白氏六帖』にもおよび、また蜀主に九經の刊行を請い実現させている。昭裔の一連の印刷事業は斯学ではよく知られ、五代の印

刷史を概説する際には必ずふれられる。遺憾ながら、これらは一本も現存しない。通説ではこの時の刊刻が『文選』印刷の最初である。母昭裔刻書のこととは諸書に記録がある。しばしば引かれるのは、南宋の王明清『揮麈録』餘話卷二と『宋史』母守素伝との記事である。

C 母丘儉、貧賤時、嘗借文選於交遊間、其人有難色、發憤異日若貴、当板以鏤之遺學者。後仕王蜀為宰、遂踐其言刊之。印行書籍、創見於此。事載陶岳五代史補。〔揮麈録〕餘話卷二）

D 母守素、字表淳、河中龍門人。父昭裔、偽蜀宰相、太子太師致仕。……昭裔性好藏書、在成都、令門人勾中正・孫逢吉書文選・初學記・白氏六帖鏤板。守素竇至中朝行于世。大中祥符九年、子克勤上其板、補三班奉職。〔宋史〕卷四百七十九、母守素伝）

Cはすでに指摘があるように、母昭裔であるべきを母丘儉に、孟蜀（後蜀）であるべきを王蜀（前蜀）に誤るなどいくらか不備があるけれど、『文選』の印行はまちがいない。⁷⁾ただ刊刻の時期が明白でない。母昭裔が相位についたのは、後蜀の後主孟昶が即位した明くる九三五年である（『資治通鑑』卷二百七十九、清泰二年四月庚午条⁸⁾）。致仕は九六一年（『統資治通鑑長編』卷二、建隆二年五月条、死亡は九六七年（同上書卷八、乾德五年十一月乙酉条）であった。Dに版下の書者として名のあがる勾中正は『宋史』卷四百四十一に伝がある。そこに「孟昶時館於其相母昭裔之第」とあることから、昭裔の孟昶代の宰相であったと知られる。おなじく版下を書いた孫逢吉は、広政十四年（九五二）に孟昶の命により成都の学宮に建てられた石経でも『易経』の書き手を務めた。南宋の范成大「石経始末記」（明・周復俊『全蜀藝文志』卷三十六）に「周易、辛亥歲陽鈞孫逢吉書」とあることより知られる。「辛亥歲」は広政十四年である。後蜀が宋に降った直後、逢吉は宋の太祖より命ぜられ後蜀朝の「法物圖書経籍」などを開封に移送している。⁹⁾その方面の知識をかわれたのだろう。『資治通鑑』卷二百九十一、広順三年五月丁亥条には「自唐末以来、所在学校廢絶。蜀母昭裔出私財百万營学館、且請刻板印九経、蜀主從之。由是蜀中文学

復盛」とある。広順は後周の年号で、その三年は後蜀の広政十六年（九五三）にあたる。これら母昭裔による文化事業は、おおむね九四〇年ごろから九五〇年代の史事と考えられる。『文選』刊刻もそのうちだろうから、時間的には寛弘七年以前の日本舶載は可能である。

母本『文選』の注について附言する。該本の注の有無また附注とすればだれの注かといったテキストの内容について、従来これを明記した史料がないとしながらも当時の五臣注の盛行から五臣注本に推す理解が通説であった。⁽¹⁰⁾ わたしは通説に一つの論拠を追加したい。Dなどによって、母本の版本は孫の克勤によって真宗に献上されたこと知られる。これが大中祥符八年（一一一五）の史事である。しかし、その版本は六年後の天禧五年（一一二一）の証言によれば摩滅がはげしく刷りに適さなかったようだ。証言とは『宋会要輯稿』職官二八之二「国子監」にみえる劉崇超の上奏である。

（天禧五年）七月、内殿承制兼管勾国子監劉崇超言、本監管經書六十六件印板、内孝經・論語・爾雅・礼記・春秋・文選・初学記・六帖・韻対・爾雅釈文等十件、年深訛闕、字体不全、有妨印造。昨礼部貢貢院取到孝經・論語・爾雅・礼記・春秋皆李鶚所書旧書、乞差直講官重看楊本雕造。内文選只是五臣注本、切見李善所注該博、乞令直講官校本、別雕李善注本。其初学記・六帖・韻対・爾雅釈文等四件、須重写雕印。並從之。

「年深訛闕、字体不全、有妨印造」とされた十書のうちの『文選』の印板とは、宿白のいうとおり母克勤によって献上された母本の版本だろう。⁽¹¹⁾ 劉崇超が「内文選只是五臣注」と明言するのは母本『文選』が五臣注本であった有力な証拠になるはずだ。「初学記・六帖」は母氏刊本のこの二書であると推量される。両本の「重写雕印」がもとめられるのに対し、母本『文選』の重刊は要請されなかったことも注目される。崇超は李善注の該博をいい李善単注本の刊刻を進言しているから、五臣注はあらたに版木をおこす価値をみとめられなかったと推される。ようやく五臣注の地位の低下がはじまっていたのだろう。李善単注本の印行はつづいて述べる国子監本によって実現を見

た。

つぎは(二)である。北宋の国子監は二度、『文選』をそれも李善单注本を印刷している。すなわち初修本と重修本とである。目下この時が李善注本のはじめての印刷とされる。両本の刊刻については比較的史料がのこっている。岡村繁『重修北宋国子監本『李善注文選』序説』(『立命館文学』第五九八号、二〇〇七年)に要を得た解説があるから、それにより整理しておこう。

重修本が製作されたのは、初修本が大中祥符八年四月の「宮城大火」で焼失したからである。重修本の校勘印行は、寛弘七年よりあとの天聖(一〇二三―一〇三二)初年に開始されたので、重修本は小論の考察対象にならない。初修本はどうか。初修本の校勘作業は景德四年(一〇〇七)にはじまったが、完成印行されたのは大中祥符四年(一一一三)である。寛弘七年には間に合わない。「摺本注文選」は初修本ではありえない。

以上の考察から消去法によって、Aの「摺本注文選」は母本に解決したように見える。しかし、じつはもう一本、候補の資格をもつテキストがある。

二 両浙本

第三のテキストはつぎの本である。

(三) 両浙(おそらく杭州)刊五臣注本(二〇二六年以前)

両浙本の存在は、近年注目されている朝鮮王朝の宣德三年(一四二八)活字印本六家注『文選』(以下、朝鮮宣德本)末尾の記述により知られる。⁽¹²⁾朝鮮本は宋本を祖本にもつばあいがあつて、刊行の時期がおそくとも価値はしばしば宋本に劣らない。朝鮮宣德本はその例にあたり、底本は北宋の秀州州学刊六家注『文選』(一一〇九四年刊、亡失)である。秀州本は、朝鮮宣德本末尾にのこる跋文三篇から、前述の北宋国子監重修李善单注本と平昌孟氏刊

五臣单注本（一〇二六年刊。亡失）とを合刻した本と判明する。五臣注与李善注との合刻は、秀州本にはじまるようである。

朝鮮宣德本末尾の跋文三篇のうち、小論にとつて重要なのは沈巖「五臣本後序」である。同序は天聖四年（一〇二六）の年紀をもつ。もともとは孟本の卷末にあつたと考えられる。そこには左記のごとくある。

E 二川両浙、先有印本。模印大而部帙重、較本粗而舛脫夥。舛脫夥則轉迷亥亥、誤後生之記誦。部帙重則難資巾箱、勞游學之負挈。斯為用也、得尽善乎。今平昌孟氏、好事者也。訪精當之本、命博洽之士、極加考覈、弥用刊正、（割注略）小字楷書、深鏤濃印、俾其扶輦^{ムツ}可以致遠、字明可以經久、其為利也、良可多矣。

注目すべきは「二川両浙、先有印本」の句である。「今平昌孟氏」云々という「今」こそが天聖四年だから、同年以前に「二川」と「両浙」とで『文選』の刊刻があつたことになる。割注には「旧本」の語があつて、孟本以前のこの二本を指すと解される。沈序は「旧本」の李善注か五臣注かあるいは無注かの別をいわないけれど、該序が「五臣本後序」と題され、また冒頭に「若夫爰文之華実・匠意之工拙、梁昭明序之詳矣。製作之端倪・引用之典故、唐五臣注之審矣」といふ蕭統と五臣とを併称して他注にまつたく言及しないことから、二つの「旧本」は孟本と同様に五臣单注本と思われる。

さて「二川」と「両浙」とはどこか。

「二川」は、東川（いまの重慶およびその周辺）と西川（成都およびその周辺）との合称で、つまるところ蜀の異称である。唐の馮宿が太和九年（八三五）に奏請して、民間による暦の印刷を禁止するよう説いているうち、印刷の印刷地をば「劍南両川及淮南道」と指摘する（『冊府元龜』卷百六十）。「両川」は「二川」に同義で、「劍南」も同じく蜀を指す。馮宿の「劍南両川」も沈巖の「二川」も指示するのは蜀だが、実体は成都であろう。蜀の印刷の中心が成都から眉山に移るのは南宋以降である。

成都では唐代から印刷がさかんであった。馮宿の上奏文のほか、たとえば日本の入唐僧宗叡が咸通六年（八六五）に記した『新書写請来法門等目錄』（『大正藏』卷五十五）に「西川印子唐韻一部五卷、同印子玉篇一部卅卷」の著録を見ることからそれは諒解される。『玉篇』の三十巻というサイズは、唐代の印本としては特大というべきで、印刷の最先端であった成都ならではと思われる。母昭裔らの刊刻が実現したのも該地での唐代以来の蓄積があったればこそである。成都の印刷業は、北宋に入っつていっその隆盛を見せ、北宋初期にあつては宋の印刷事業の中心であつた。喬然（九三八―一〇一六）の将来したこと著名の開宝蔵が成都で開版されたのは、ゆえあることである。

二川本が蜀版とすれば母本との関係が問題になる。状況証拠から両者は同一本と思われる。論拠はつぎの三点、①ともに蜀刊五臣注本『文選』であること、②印刷時期が近接すること、③沈序が母本について全くふれないのは不自然であること。③についてことばを継ごう。母昭裔の男守素（九七三年歿。享年五十三）は後蜀滅亡（九六五年）ののち北宋につかえたが、Dの「守素齋至中朝行于世」によつて守素が開封に母本のおそらく版木をもちこみ印刷通行したことが知られる。それから約六十年後の天聖四年当時、母本の存在が忘却されていたとは考えがたい。饒宗頤も二川本が母本を指すとしている¹³。そう考えれば、史料のほとんどのこらない両浙本さえ挙げる沈序が、母本についても言及している結果になり、すべてのつじつまが合う。

もう一箇所の「両浙」は、北宋の行政区分でいえば両浙路である。明白な記録はないけれど、実質は杭州を指すと推量される。天聖四年以前の両浙路にあつて、五臣注『文選』の三十巻という大部な書籍の刊行が可能な地となれば杭州のほかは考えにくい¹⁴。北宋の両浙路は諸処で印本が生産されたが杭州の印本製作が最も早く、他処での印刷事業の創生は杭州におくれる。

杭州の印刷文化は呉越時代すでに質量とも高い水準にあつた。当時の遺物として『宝篋印経』がある。呉越最後

の王であつた錢俶（在位九四八―九七八年）が印刷させた刊経で日本にもつたわつた。三次の印経が確認され、そのうち最後の乙丑（九六五年）本は、紙質をふくめのちの宋本におとらない精妙な仕上がりで、呉越印本の完成度の高さを証明している。⁽¹⁵⁾ 九七八年、呉越が宋に降つたのち杭州の印刷文化はいつそうの発展を見た。北宋刊本の主流は官刻本だが、太宗時代より少なからざる国子監本がじつは開封ではなく杭州で開版された事実は杭州の実力の高さを示している。北宋中期以降には、杭州こそが両浙路のみならず宋代の印刷の中心であつた。⁽¹⁶⁾

果たして、Eの「二川両浙」が成都と杭州という推定を得た。⁽¹⁷⁾

さて、宋代の『文選』読書史のおおきな流れを所依の注釈の側面からいえば、それは五臣注から李善注への移行であつた。なお五臣注の完全な放棄にはいたらないとしても、該注の刊刻史を一閱するに、六家注（五臣、李善の順）本から六臣注（李善、五臣の順）本への流行の変化は明らかで、五臣注の地位の漸次低下が看取される。地位の低下と李善五臣合注本の盛行とで、五臣単注本はほとんど伝を絶つた。現存する宋版の五臣単注本『文選』はわづか二本しかない。紹興三十一年（一一六一）刊建陽陳八郎本と南宋極初刊杭州鍾家本とだ。小論にとって、後者は興味ぶかいテキストである。

鍾家本は卷二十九（北京大学図書館蔵）と卷三十（国家図書館蔵）との二巻のみが現存する。卷三十（五臣注『文選』は全三十巻だから、つまり最終巻）の尾題あとに「錢唐鮑洵書字」とあり、その裏葉に「杭州猫兒橋河東岸開牋紙馬鋪鍾家印行」の刊記がある。遺憾ながら両卷全本の影印はないようで、わづかに北京図書館編『中国版刻図録』（朋友書店、一九八三年複刊。初版一九六一年）に卷三十の巻首と巻尾との書影が収載される（図版五・六⁽¹⁸⁾）。わたしはなお鍾家本残巻全葉を閲する機会をもっていないが、『中国版刻図録』の解題（八頁）、該本卷三十を実見した阿部隆一の調査報告⁽¹⁹⁾、傳剛の紹介論文⁽²⁰⁾によって書誌的情報を得た。

注目すべきは鍾家本の避諱である。阿部によれば、缺筆が「玄絃警弘殷筐恒貞」の諸字にあるという。避諱は仁

宗（諱は「禎」。「貞」は嫌名）までで英宗以降は避諱していない。鍾家本が南宋初年の刊刻であることはほぼ明白だから、この避諱の状況は該本の底本の字面を反映していると考えられる。南宋初期には北宋刊本の覆刻がさかんで、鍾家本もその一本であろう。⁽²²⁾ 避諱の状況からは、底本の刊刻時期の上限が仁宗朝であることしかみちびけない。しかしわれわれは、くだんの底本にふさわしい本をすでに知っている。孟本である。孟本は沈序によって仁宗の天聖四年の刊刻と判明している五臣单注本である。孟本は鍾家本の底本に必要な条件を唯一みたしている。⁽²³⁾

孟本（少なくともその五臣注部分）は秀州本を介して朝鮮宣徳本に保存されているはずだ。いま鍾家本の書影が『中国版刻図録』収載の卷三十巻首巻尾のみに限られているので比較量は不十分だが、朝鮮宣徳本と鍾家本との対校をこころみた。朝鮮宣徳本の正文は李善注本の影響をうけている可能性が消えないから、対校する価値があるのは五臣の注文のみである。結果はほぼ全同であった。「ほぼ」というのは、朝鮮宣徳本の二字が印字不良で判読できないこと、朝鮮宣徳本の五臣注一条が同条の李善注文にほぼ包摂されているので「五臣注同」と省略されていること、以上二点によるのであつて実質は全同といつてよい。鍾家本残巻全葉との対校が実現すれば、両本の一致はよりはつきりすると思われる。

以上、母本（二川本）、両浙本、孟本、秀州本、鍾家本、朝鮮宣徳本に継承関係があると主張した。鍾家本は刊記によって刊行地が杭州であつたと判明しており、秀州が杭州の北となりであることを勘案すると、孟本の刊行地も杭州の可能性が高い。孟氏が平昌（現山東省安邱県）の人であつたとしても刊行地まで平昌に考える必要はない。この杭州を中心とする五臣注『文選』印刷の伝統は、両浙本にはじまるのだろう。おそらく両浙本は杭州における刊本五臣注『文選』の祖本にあたる。

両浙本については情報が少ない。しかし、その内容を保存すると推されるテキストがある。正徳四年（一五〇九）に朝鮮王朝で刊行された五臣单注本『文選』（以下、朝鮮正徳本）である。⁽²⁴⁾ 該本は両浙本を、直接か否かは明

白でないが底本にもつと推量される。磯部彰は、朝鮮宣徳本の五臣注部分と朝鮮正徳本のそれとを対校し、両者が近似するも微細な異同が少なくないことを明らかにした。磯部は、このわけを朝鮮宣徳本五臣注が秀州本を介し孟本を、朝鮮正徳本が孟氏校訂以前のテキストである両浙本を、それぞれ祖本にもつことより生じたと説明した⁽²⁵⁾。つまり朝鮮宣徳本と朝鮮正徳本とにある五臣注文の異同は、孟本と両浙本との異同の反映というのだ。磯部説は史料的状态をうまく説明しており合理的だ。磯部説を承認すれば、両浙本はほぼそのまま朝鮮正徳本に受け継がれたということになる。

小論末尾に、推定される「五臣注『文選』刊本の系譜」を提示する。参照されたい。

三 「摺本注文選」の比定

以上の二章にわたる考察から、「摺本注文選」の候補には母昭裔本(二川本)、両浙本の二本がのこった。母本は十世紀なかばの印行だから、寛弘七年以前の日本将来は可能である。両浙本の刊行時期は、いまのところ孟本の刊刻された天聖四年より前としかいえないけれど、寛弘七年以前の舶載の可能性はなおのこる。果たして道長所蔵の「摺本注文選」には、母本と両浙本とどちらの可能性を存し一方をえらぶには至らない。『文選』印刷史からの探索はここに途絶を餘儀なくされた⁽²⁶⁾。

しかし手がかりはある。着目すべきは、道長所蔵の「摺本注文選」がほぼ確実に五臣注本であることだ。Aの時点で李善注刊本は存在しない⁽²⁷⁾。それで想起されるのは『御堂関白記』寛弘三年十月二十日条のつぎの記事である。

F 唐人令文所及蘇木・茶坑等持来、五臣注文選・文集等持来。

「令文」は宋商の曾令文をいう。Fは道長が寛弘三年(一〇〇六)に宋商より五臣注『文選』と『白氏文集』と入手したことをおしえる。寛弘七年のわづか四年前、しかもF「五臣注文選・文集」はA「摺本注文選・同文集」に

符合する。両者は同一の品と思われる。

Fに注目し、A「摺本注文選」||F「五臣注文選」、A「同文集」||F「文集」の等式を漠然と想定する研究者はこれまでもいた。⁽²⁸⁾ それらに論拠の記載はないのだが、『御堂関白記』現存巻のうちF以外に「摺本注文選・同文集」の入手記事として適当な記載がないことから主張されたと思われる。

『御堂関白記』は長徳四年（九九八）の七月から治安元年（一〇二一）の九月までが断続的にのこっている。A以前の残存状況は長徳四年七月以降でいえば、長保二年後半から同五年末まで三年半分の缺巻をのぞいて、ほぼそろっている。兄の道隆、道兼があいついで死去し道長が右大臣にのぼるのが長徳元年、翌年には左大臣に就き、道長は名実ともに最高権力者となる。『御堂関白記』の存巻は、道長が「摺本注文選・同文集」を入手するにふさわしい時期を、缺落部分をさしひいてもなお大量にたもっており、そしてFが問題の入手記事であれば、およそつじつまが合う。「摺本注文選」の五臣注本のほぼ確実を実証できたいま、AF二書の同一説は一定の論拠にささえられている。

曾令文は長保年間と寛弘年間と二度の来日が確認できる。初回は長徳三年（九九七）から長保四年（一〇〇二）のあしかけ六年の長期滞在になった。⁽²⁹⁾ このときの来日は藤原行成の『権記』に見え、支払いについての道長の発言が記録されている。ついで寛弘二年（一〇〇五）に再来日、この翌年に「五臣注文選・文集」を道長に贈るのである。蒐書に熱心な道長のこと、初回来日時⁽³⁰⁾の令文に漢籍購入の希望をつたえた可能性はある。

「摺本注文選・同文集」曾令文将来説は積極的徴証こそ得がたいけれど、まずは妥当な理解というべきである。該説が是認されたとすれば、さきに中断した母本か両浙本かの択一にある視点がひらける。それは、当時の海外交易の中核都市であつた杭州と両浙本との近しさである。

唐代後半の海外交易の中心は長江河口域なかんづく揚州であつた。しかし八世紀後半より徐々に進行した砂浜現

象、九世紀なかば以降の戦乱によつて揚州は衰退、かわつて繁栄したのが錢塘江河口域であつた。中心都市は杭州である。⁽³⁰⁾ 唐末そして呉越から宋へ、杭州・明州と博多とには頻繁な海上交通があつた。榎本涉によれば、十一世紀になると宋商の発着地は明州およびその延長としての杭州に一本化するといふ。⁽³¹⁾ ちょうど道長の時代である。

「摺本注文選」が両浙本であれば、宋商の令文にとつて入手は比較的容易なはずだ。Dなどが母本の開封における通行をいうが、海上を主舞台にした海商にとつて母本入手の困難度は両浙本のそれにくらべ格段におおきい。北宋初期における刊本の流通の程度をおおきく見積もるのは危険である。

呉越時代を前史とした、天台山と日本仏教界との活発な交渉もこの見方を後押しするだろう。源信が自著『往生要集』など日本撰述の天台典籍を、来日した杭州水心寺の僧齊隠に贈り宋での流布を託したことはよく知られている。⁽³²⁾ これが永延二年（九八八）のこと。上川通夫によればそれ以降、日中天台宗間の交流がとくに活発になるといふ。そのうちには道長ら日本の政府中枢のつよい意向がうかがえ、それは宋皇帝膝下の開封の仏教ではなく江南の天台浄土教の移入を選択したあらわれといふ。論頭に引いたBの念救の帰朝は天台山大慈寺再建の寄進を道長らにつるためであり、念救の再渡宋にあつて道長らは砂金百両や種々の仏具を施送している。ここにも道長の天台浄土教への注視がうかがえる。この交流を媒介したのは曾令文ら海商である。天台山を有する両浙地方と曾令文と、そして両浙本と、かわわりはいつそう密接になつたと思われる。

さきに「摺本注文選」を比定するに、母本と両浙本と印刷史からはどちらをとるべきか決することができなかった。しかし当時の日宋間の交易、道長の天台浄土教への注視という視点をくわえれば、両浙本の可能性が俄然つまる。もつとも直截に両浙本説を説くことも史料の不備からかなわなない。両浙本説は蓋然性が高いといふにとどまるけれど、状況的にはまずは妥当な比定と考える。この比定が正しければ、両浙本の刊刻時期は、曾令文が再来日した一〇〇五年（宋の景德二年）以前ということになる。

おわりに

果たして小論は「摺本注文選」をば杭州印行と推される両浙本に比定した。両浙本は朝鮮正徳本にほぼ保存されているはずだから、本邦の『文選』諸本などの書込みのうちに朝鮮正徳本とのみ共通する文字があったばあい、その依拠したテキストは道長旧蔵本またはその重鈔本の可能性がある。それにしても道長の刊本入手はおどろくほど迅速である。かれは当時の政府中枢にあり、大宰府の役人（平親信など）ともつよいコネクションがあったから、舶載品の情報も比較的すみやかに得られたろうし購入の便もあったのだろう。

これで小論の目的は達せられた。最後に、道長の事例を中心とした当時の宋刊本入手の意義はどう評価されるか、二点にわたり述べておこうと思う。

第一に日本印刷史にとって。その意義は小さくないはずだ。「百万塔陀羅尼」をしばらくおけば、日本の印刷の創始は摺経供養という写経の一形態である。法華経を主として仏経を印刷し功德をつむのである。摺経の史料初出はほかでもない『御堂関白記』で、寛弘六年十二月十四日条に「又太内御願千部法華経摺初」とある。道長が曾令文から宋刊本を贈られた三年後である。これが摺経の草創であるかはともかく、摺経供養が寛弘年間（一〇〇四～一〇一一）ごろにはじまるのはほぼ確実とされる。紙が非常に高価だった時代、摺経の実施には膨大な資本力が必要。時期また財力からいって、道長が摺経の極初の実行者であることはまちがいない、あるいはかれが創業主だったかもしれない。

摺経勃興の背景に新渡の中国刊本を説くむきが多い。とくに裔然の将来した開宝蔵五千四十八巻の影響はよく指摘される。³⁴ おそらくそうなのだろう。ただ注意すべきは、摺経の創始が裔然の帰朝（九八七年）直後でなく、約二十年後の道長が政権の座にあった時期であることだ。³⁵ また入唐僧の将来品に刊本がまじっていたから、裔然以前に

刊経の存在は知られていただろう。開宝蔵の影響をみとめるにやぶさかでないが、宋商からの宋刊本進呈が道長を摺経に誘引した可能性も考慮されてよい。摺経の影響は奈良にもおよび、書籍印刷のはじまりというべき春日版をおこした。意義の小さくないゆえんである。⁽³⁶⁾

第二に日本の学藝史にとって。印刷史上の意義は宋刊本のモノとしての寄与であるが、これと対照的に印刷された本文の影響は道長のころには限定的であったと思われる。鈔本は異本を生じやすい。極端なことをいえば、鈔写をくりかえすたびに本文を異にしたテキストができあがる。唐以前はこうして生まれた多様な異本が並存する時代であった。その後、宋人の校訂によって定本がつくられ、印刷の普及によって異本の淘汰が実現した。⁽³⁷⁾

道長ら平安の貴顕たちが中国刊本を渴望したことはしばしば指摘されるが、かれらは新渡の刊本と伝世の古鈔本との差異をどう認識していたか。たとえば『白氏文集』の刊本の本文と旧鈔本の本文とに大量の異同のあることはよく知られるけれど、「宋版本の本文が、旧鈔本のそれを退ける程、一般にも影響を与えたとは到底考えられないし、それどころか、両種の本文が相違すること自体ですら、どれ程これを承知していたか、甚だ疑わしく思われる。……宋版本は、依然としてごく稀覯の書物であり、一部、最上流の間に、一種の財宝として、秘蔵されたに過ぎない」とした太田次男の評価が適当だろう。⁽³⁸⁾

中国では刊本の普及にともない伝世の古鈔本は急速にほろんだ。同様のことは日本でもおこった。とくに南宋以降に福建を主産地とした坊刻本が比較的多く舶載されるようになると、刊本に依拠する学問研究が流行し、中国刊本の本文に追随し古鈔本がつたえた本文が改変される事態を生じた。⁽³⁹⁾ 道長のころ早くも刊本崇拜の風はつよかったが、なお流通量が極少であったため古鈔本を駆逐するにはいたらなかった。ただし、刊本中心主義の萌芽はこの時期にもとめられる。

道長のころ刊本がもてはやされたのは、宋版特有の刻字の美観といった、唐物——舶来のモノとしての優秀性が

評価されたからではないだろうか。評価の基準は、瑠璃壺、秘色青磁、沈香といった唐物と同列であったと推量される。^⑩本文校訂など学問水準の優劣が判断されたことは、おそらくあるまい。宋刊本はつまるところ威信財として受容された。ただし威信財として機能することは、その本文の信用度を高めたろう。しだいに刊本を尊重する学問研究が展開する下地はこの辺りに見出せる。

平田昌司は日本における漢籍の伝承について、奈良・平安時代初期と平安時代末期・鎌倉時代とのあいだに大きな断層と空白とを見ている。^⑪道長の時代はまさにこの断層のうちにあり、そのころを分水嶺に前後の学問の質が連続しないということである。不連続の解釈には種々あり得るが、道長以降に刊本が加入するという書籍の流通の変化も一背景としてあると思われる。刊本が日本にも登場し、その本文の信用度が上昇するのともなつて旧鈔本文に依拠した旧来の学問は流行おくれとなり、刊本に依拠して新展開をはかったと考えられる。道長時代の中国刊本の舶載はなお微少であつたが、日本の学藝史にとつてもあだ疎かにできない。

註

(1) 飯沼清子「藤原道長の書籍蒐集」(『風俗』第二七卷第二号、一九八八年)、岡部明日香「藤原道長の漢籍輸入と寛弘期日本文学への影響」(王勇・久保本秀夫編『奈良・平安期の日中文化交流——ブックロードの視点から』農山漁村文化協会、二〇〇一年)、隴谷寿「藤原道長——男は妻がらなり」(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)一五九〜一六〇頁の諸論著を参看。漢詩人としての道長を論じた光島民子「御堂関白記の一考察——文人道長を中心として」(『女子大國文』第四六号、一九六七年)に

も関説するところがある。
(2) 道長と親しかった藤原行成(九七二〜一〇二七)の日記『権記』寛弘七年十一月二十八日つまり同日条にも道長の摺本献上をつたえ、「摺本文選」「摺本文集」の文字がある。

(3) 長澤規矩也「わが国における漢籍の翻刻について」(『長澤規矩也著作集』第二卷、汲古書院、一九八二年、初出一九五七年)によれば、仏典をのぞく漢籍について、現存最古の和刻本は正中二年(一二三二)刊『寒山詩』で、寒山を仏家としてこれを除外すれば、延文四年(一一

三五九) 刊『詩法源流』という(二八一頁)。いまのところ外典の和刻が平安以前にさかのぼる徴証はない。日本での印刷の創業時期には議論がある。有名な「百万塔陀羅尼」(七六四～七七〇年)を印刷物と認定するか否か、端的にいえばその印出法が摺刷か押捺か決着していないからだ。増田晴美編著『百万塔陀羅尼の研究——静嘉堂文庫所蔵本を中心に』(汲古書院、二〇〇七年)によって最新の知見がしめされたが、摺刷か押捺かを決めるにはなお時間がかかりそうである。「百万塔陀羅尼」のち二百年あまりは印刷の空白期で、ついで知られるのは十一世紀初頭の摺経供養(後述)である。摺経供養が印刷の創業か再開かはともかく、それは写経の簡便な代替法であり書籍印刷とはやや性格をことにする。書籍の印刷というばあい、その嚆矢を院政期ごろおこる春日版におく大内田貞郎の見解が、わたしには妥当と思われる。春日版の最古の遺品は寛治二年(一〇八八)刊『成唯識論』である。大内田「東洋における印刷技法と日本の書物装訂・印刷について」(『杏雨』第四号、二〇〇一年)七二～七四頁参看。

(4) 拙稿「日本側史料から見た『白氏文集』の北宋刊本」(『白居易研究年報』第一一号、二〇一〇年、掲載豫定)。

(5) 宋代の『文選』刊刻の歴史は、岡村繁「宋代刊本『李善注文選』に見られる『五臣注』からの剽窃利用」(『村山吉廣教授古稀記念中国古典学論集』汲古書院、二〇〇〇年)に一覧されている。また、范志新『文選版本論

稿』(江西人民出版社、二〇〇三年)には簡略な「《文選》版刻年表」がそなわる。

(6) 『宋会要輯稿』は、母克勤の版本献上を大中祥符八年に繫年している。同書崇儒四之一八「求書藏書」に「九月七日、以故国子祭酒知容州母守素男克勤為奉職、克勤表進文選・六帖・初学記印板。枢密使王欽若聞其事故也」とあり、その直前は同年四月条、直後ほうも天禧元年八月条である。『宋会要輯稿』の記載法は各項目内編年だが、紀年の重出を避けこれを省筆するので条録に誤脱があったばあい紀年はくるつてしまう。いま八年か九年かを決する材料をもたない。小論はいちおう八年説をとっておく。なお、この四月条は後述する国子監初修本を焼いた宮城火災の記事である。克勤の版本献上は初修本焼亡をうけての行動と推される。

(7) 不備の子細をふくめ母昭裔刻書のこととは、李書華「五代時期的印刷」(『大陸雜誌』第二一卷第三期、一九六〇年)五く六頁にくわしい。その補訂を、翁同文「近人引述母昭裔刻書事訂補」(『大陸雜誌』第三七卷第九期、一九六八年)がなしている。なお北宋の陶岳『五代史補』五巻は現存するが、王明清の引いたこの文章は見あたらない。『四庫全書總目』の提要は伝写の間の遺漏であろうという(史部雜史類)。

(8) 当該条の胡三省注が「母、姓也。母丘氏或為母氏、望出平昌・鉅鹿」という。後掲「五臣本後序」にいう天聖四年刊五臣注『文選』の刊刻者が「平昌孟氏」であることと関聯があるのだろうか。存疑としておく。

(9) 『宋会要輯稿』崇儒四之一五「求書藏書」乾德三年九月条。

(10) たとえば、范志新『文選版本論稿』（前掲）一七六～一七七頁参看。唐の開元年間に五臣注が成りこれを玄宗が評価してより、『文選』の所依の注釈は李善ではなく五臣のものが通例となった。五臣注重視の風は北宋にまでおよんだ。北宋の蘇東坡の評語「李善注文選、本末詳備、極可喜。所謂五臣者、真俚儒之荒陋者也。而世以為勝善、亦謬矣」（『東坡志林』卷一ほか）はその一証である。東坡は当時かず少ない李善注支持者であった。北宋国子監李善注文本の刊刻は、なお流行のつづく通俗的注解というべき五臣注駆逐の意味もあつたと思われる。それは一定の成功をえた。兩注釈の盛衰については、岡村繁「宋代刊本『李善注文選』に見られる『五臣注』からの剽窃利用」（前掲）参看。

(11) 宿白『唐宋時期的雕版印刷』（文物出版社、一九九九年）二四～二五頁。

(12) 該本は、韓国ソウル市の奎章閣と日本の東京大学東洋文化研究所とに収蔵されている。磯部彰「朝鮮版『文選』六臣注本の諸版本」（『東北アジア研究』第四号、二〇〇〇年）の調査によっても、両者が同版であることが判明する。奎章閣本がソウル市の正文社より影印されており（一九八三年）、わたしはこれを閲覧した。

(13) 饒宗頤『唐代文選学略述』（『饒宗頤二十世紀學術文集』第十六冊、新文豐出版、二〇〇三年。初出二〇〇〇年）七四三～七四四頁。なお、磯部彰「朝鮮版五臣注

『文選』の研究」（『東北アジアアカルト』第一七号、二〇〇七年）は、「二川」本をば母本とは別の未知の北宋刊本に比定するが（四五～四九頁）、あらたな謎を生むだけである。傳剛『『文選』版本研究』（北京大学出版社、二〇〇〇年）は、「這二川・兩浙刻本應該都是從母氏刻本而來」というのみである（二九八頁）。

(14) 兩浙路では、たとえば蘇州の印刷も有名だが、蘇州での出版事業は北宋の嘉祐四年（一〇五九）に『杜工部集』を刊刻したのが最初とされるから、「旧本」を刷つた「兩浙」は蘇州ではないと思われる。戸崎哲彦「范成大『石湖大全集』の亡佚と『石湖居士詩集』の成立」（『島大言語文化』第二三号、二〇〇七年）一八頁参看。『宝篋印経』については、張秀民「五代吳越国的印刷」（『張秀民印刷史論文集』印刷工業出版社、一九八八年。初出一九七八年）にくわしい。

(15) 王国維『兩浙古刊本考』序（『王国維遺書』第二二冊、上海古籍出版社、一九八三年。初版一九四〇年）は「北宋監本刊于杭者、殆居泰半」という。五代から兩宋における杭州の印刷文化については、張秀民（韓琦増訂）『中国印刷史』上（挿図珍藏増訂版、浙江古籍出版社、二〇〇六年）の、五代は三三～三七頁、宋代は四八～五六頁などを参看。

(17) 北宋末から南宋初の学者葉夢得『石林燕語』巻八に「今天下印書、以杭州為上、蜀本次之、福建最下。京師比歲印板、殆不減杭州、但紙不佳、蜀与福建多以柔木刻之、取其易成而速售、故不能工」とある。藏書家として

知られる夢得の評であれば信をおけよう。ここにいる杭州、成都(蜀)、福建に都の開封をくわえた四地域が北宋時代の印刷業の中心であった。たとえば、朱迎平『宋代刻書産業と文学』(上海古籍出版社、二〇〇八年)四二頁参看。当然の帰結というべきだが、「二川兩浙」は当時の印刷文化の最先端地域ということになる。

- (18) くわえて、范志新編撰『文選版本摺英』(貴州人民出版社、二〇〇四年)によつて、巻二十九の卷首半葉の書影が見られる(一五頁)。

- (19) 阿部隆一「北京南京上海観書記」(『阿部隆一遺稿集』宋元版篇、汲古書院、一九九三年。初出一九八二年)四二一〜四二三頁。また、阿部『増訂中国訪書志』(汲古書院、一九八三年)にも同趣旨の解説あり(五九六頁)。
- (20) 傳剛「關於現存幾種五臣注《文選》」(前掲『文選』版本研究)。

- (21) 「錢唐鮑洵書字」の鮑洵なる人物は、紹興三十一年(一一六〇)刊『心賦注』巻四末に見える「錢唐鮑洵書」の鮑洵と同一人と考えられる。また、杭州が臨安府に昇格したのは建炎三年(一一二九)である。以上の徴証から、鍾家本が南宋初年の刊刻であることはほぼ確実である。前掲『中国版刻図録』の解題を参看。さて、鮑洵が版下の書者ということは、鍾家本は被彫によつたのではなく、底本を見ながら鮑洵が筆写して版下をこしらえたと推される。後述のごとく底本が孟本とすれば、孟本の文字が小さすぎたため版式を変える必要があつたかあるいは底本の貴重さゆえそのまま版下にできなかった

からか。

- (22) たとえば、尾崎康『正史宋元版の研究』(汲古書院、一九八九年)三三頁、同「宋版鑑別法」(『ビブリア』第八五号、一九八五年)八・一一〜一三頁など参看。

- (23) 傳剛「關於現存幾種五臣注《文選》」(前掲)も底本を孟本に擬する(二五五頁)。

- (24) 朝鮮正徳本は複数の伝本をみるが、首尾のそろう東京大学東洋文化研究所蔵本が同研究所ホームページの「漢籍善本文影像資料庫」で公開されている。小論も該本の閲覧には同資料庫より恩恵をうけた。該本の専論に三篇あり。黒田亮「五臣注文選の研究」(『朝鮮旧書考』岩波書店、一九四〇年)、金学主(豊福健二訳)「李朝刊『五臣注文選』について」(『中国中世文学研究』第二四号、一九九三年。原論文の発表は一九九〇年)、磯部彰「朝鮮版五臣注『文選』の研究」(前掲)。なお、黒田論文は朝鮮宣徳本・朝鮮正徳本に関する初期の研究で、すでに朝鮮宣徳本と秀州本と、また孟本、国子監本との関係を正確に認定している(一八九〜一九一頁)。しかし、黒田の見解は長らく『文選』の版本研究家にとどかなかった。黒田論文が引拠されるようになったのは古いことではない。

- (25) 磯部彰「朝鮮版五臣注『文選』の研究」(前掲)のところに四二〜四七頁。朝鮮正徳本の底本問題について、少しくことばを継いでおく。朝鮮正徳本末尾に黃瑾の跋文があつて該本印刷の顛末を述べる。黄跋によつて朝鮮正徳本以前 成宗時代(一四七〇〜一四九四)に活字本の

五臣注本があったと知られる。黒田亮「五臣注文選の研究」(前掲)に、第十図「鑄字本五臣注文選」として書影の載る卷十二零巻が、その活字本であろうと推される。その後、姜相公(姜渾)の指導のもとふたたび開板したのが朝鮮正徳本だ。底本にかかわる記述は「公已求得善本」のみで瞭然としない。「善本」とはどのテキストか、成宗活字本と朝鮮正徳本との関係はどうか。磯部論文は両本の関係について、「決して異本、版本の系譜が異なるといった重要な要素を持つものではなく、翻刻、もしくは覆刻という書誌的体裁上の差異がある版本同士であって、(朝鮮正徳本は——池田補 成宗王時代の鑄字本の系譜にある版本である)(七頁)」という。そのうえで朝鮮正徳本を両浙本の直系とさだめる。磯部の説明で不足するのは、成宗活字本の底本が両浙本で同活字本をただ整版印刷したのが朝鮮正徳本なのか、成宗活字本も朝鮮正徳本もじかに両浙本によったのか、これに無回答のため両浙本、成宗活字本、朝鮮正徳本の三者のかかわりがはっきりしないことだ。もっとも小論にとっては、両浙本と朝鮮正徳本との継承関係が認定できれば充分である。金学主(豊福健二訳)「李朝刊『五臣注文選』について」(前掲)は、朝鮮正徳本の祖本を孟本にみとめ、磯部説と対立する。しかし金説では朝鮮宣徳本五臣注文と朝鮮正徳本文との異同をうまく説明できない。磯部説のほうが合理的だ。なお、磯部は鍾家本をも両浙本の直系であろうと論じるけれど、鍾家本は既述のとおり孟本の直系に推され両浙本とはじかには関係しないと思わ

れる。黄跋については、金論文四七〜四八頁に詳しい。

(26) 母本と両浙本との関係は明白でない。母本が両浙本に先行するだろうから、たとえば両浙本の底本が母本であるといった、母本から両浙本への影響はありうる。Eの「模印大而部帙重」の形容は二川本と両浙本と両方にかかるといっても読める。蜀版は大字で著名だから母本がそうであるのは理解しやすい。両浙本をも大字本とすれば、同本は母本の重刊本である可能性が生じる。重刊は校訂の手間をはぶけ安くあげられる。E「部帙重則難真巾箱劳游字之負挈」「小字楷書、深鏤濃印、俾其扶輕可以致遠」の文字から、孟氏は先行の大字本を排し小字本を製作したと知られる。小字の本が好まれたのは紙の価格が関係していると思われる。当時、書価のうちに最大の比重をしたのは紙価であった。大字本は必然的により多くの紙を要し高くつく。孟氏は廉価なテキストをつくらうとしたのだろう。書価と紙価との関係については、井上進「中国出版文化史」(名古屋大学出版会、二〇〇三年)一一二頁参看。

(27) 山中裕編『御堂関白記全注釈 寛弘七年』(思文閣出版、二〇〇五年)は「摺本文選」を李善注本に比するが(一九一〜一九二頁。執筆は福嶋昭治)、その可能性はない。

(28) たとえば、川口久雄『三訂平安朝日本漢文学史の研究』中篇(明治書院、一九八二年)六二四頁、小松茂美『平安朝伝来の白氏文集と三跡の研究』第二巻(『小松茂美著作集』第二巻、旺文社、一九九七年。初版一九七

六年）二二〇～二二二頁など。黒田亮「五臣注文選の研究」（前掲）はA Fの照応に注目し「摺本注文選」が五臣注本であると推すが、A Fが同一本とは考えていない口吻である（二〇九頁）。

- (29) 長保年間の来日については、河内春人「宋商曾令文と唐物使」（『古代史研究』一七号、二〇〇〇年）の專論がある。

- (30) 長江河口域から銭塘江河口域への海外交易基地の移行については、山崎寛士「港灣都市、杭州——9・10世紀中国沿海の都市変貌と東アジア海域」（『都市文化研究』第二号、二〇〇三年）、同「呉越国の首都杭州——双面の都市変貌」（『アジア遊学』第七〇号、二〇〇四年）を参看。

- (31) 榎本涉「明州市舶司と東シナ海海域」（『東アジア海域と日中交流 九～一四世紀』吉川弘文館、二〇〇七年。初出二〇〇一年）表1および四六～四七頁参看。

- (32) 上川通夫「中世仏教と「日本国」」（『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年。初出二〇〇一年）二五六～二五九頁。

- (33) 摺経については、川瀬一馬「増補古活字版の研究」上（A・B・A・J、一九六七年。初版一九三七年）一〇～二三頁、同「平安朝摺経の研究」（『日本書誌学の研究』講談社、一九七一年復刊。初出一九四〇年）を参看。たとえば、大屋徳城『寧楽刊経史』（内外出版株式会社、一九三三年）四二～四七頁、兎本正亨『法華版経の研究』（平楽寺書店、一九五四年）二～四頁、川瀬一馬

『入門講話日本出版文化史』（日本エディタースクール出版部、一九八三年）四九～五〇頁、中根勝「日本印刷技術史」（八木書店、一九九九年）六〇～六一頁など。なお開宝蔵は日本にはじめて舶載された宋刊本と推される。尙然の寂後、道長に献じられ、天喜六年（一〇五八）の法成寺焼失で失われたとされる。

- (35) 将来された開宝蔵が日本でどうあつかわれたか。しばしば日本仏教史上の劃期といわれながら、そのじつ分明でない。たとえば牧野和夫によれば、開宝蔵を底本に一切経の書写事業が実施された徴証はなく、法成寺焼失までの短期間、わずかに缺本の補充に活用されたことを確認できるのみという。牧野「十二世紀後末期の日本舶載大蔵経から尙然将来大蔵経をのぞむ」（吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』勉誠出版、二〇〇八年）九七～九九頁参看。上川通夫「中世仏教と「日本国」」（前掲）が説く日本の天台重視策ともかわつて、尙然帰朝の影響にはある種の屈折がある。

- (36) ただし摺経、春日版、開宝蔵、宋版外典は印刷法や装訂などにおのおの相違があつて、それらの影響関係は単純でない。装訂をいえば、前三者は卷子装（少なくとも折らない）であるのに後者はおそらく胡蝶装である。仏典は卷子への志向がつよかった。印刷法も春日版は料紙を貼り継いだのち印刷する「まき刷り」であるのに、開宝蔵は一紙ごとに印刷したあとと卷子（宋版外典は冊子）に仕立てる。日本では刊経は書写したそれにくらべ功徳はひくいと認識されており、まき刷りは書写經典の製作

手順に近づけるための操作と推される。そのほか冊子への印刷は高野版からだと思われるが、これは両面印刷であつて中国の印刷とは異質である。中国書籍は日本の書籍製作法に甚大な影響をあたえたはずだが、その関わり方は複雑である。中国式の書籍製作が実行されたのは五山版からだとされる。日中の書籍製作法の相違については、大内田貞郎「木版印刷本について——東洋古印刷の技法とわが国の事情」(『ビブリア』第九号、一九八八年)、同「東洋における印刷技法と日本の書物装訂・印刷について」(前掲)などを参照。

(37) 宋代また明初においてさえ、なおも鈔本こそが書籍の主流であつた。ただ底本には普及しつつあつた刊本が漸次主流になるはずで、唐以前の多様な本文が消滅していくことに変わりはない。井上進「中国出版文化史」(前掲)一七〇〜一七五・二二〜二四頁参照。

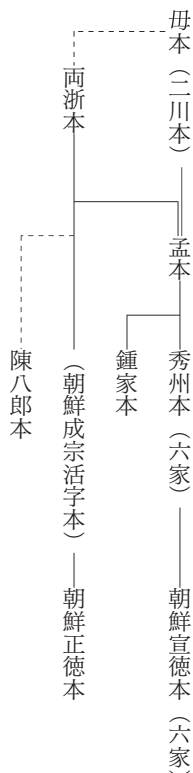
(38) 太田次男「旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究」上(勉誠社、一九九七年)一六七〜一六八頁。ついで附言する。佐藤道生「大江匡房の『文選』受容」(『平安後期日本漢文学の研究』笠間書院、二〇〇三年。初出一九九五年)は、大江匡房(一〇四一〜一一一一)が参照した『文選』の本文は李善注本より五臣注本のそれにちかいたという(九一頁および注(6))。匡房は、古鈔本と刊本とで異なるある『白氏文集』の本文について、新渡の宋刊本を積極的に活用した注目すべき人物である(佐藤同上論文集所収「『本朝統文粹』と白詩——白詩受容史上の大江匡房」参照。初出一九九三年)。もし匡房が五

臣注本を利用したとすれば奈良平安以来の『文選』受容では異例と思われ、匡房の新渡の印刷本を重視した態度を考慮すれば、一案としてかれが五臣注本によつたわけを該本が宋刊本であつたからと、発展性のある説明ができる。該本が道長旧蔵本にかかわる可能性さえうまれる。しかし、佐藤の判断はその依拠した『文選』のテキスト上の不備から生じた誤解と思しい。佐藤が例示したのは匡房の「西府作」(『本朝統文粹』巻一・七)の第二句「蒼波万里途」、第四十七・四十八句「寺僧懲跋扈、神応責睚眦」である。出典は、それぞれ『文選』所収の鮑昭「行樂至城東橋」(李善注本でいえば巻二十二)、張衡「西京賦」(同前巻二。佐藤論文が巻一「西都賦」というのは誤記だろう)という。鮑昭詩についていえば、李善注本が「万里塗」に作り匡房詩の「万里途」と異なるとし、佐藤はこれを五臣注本利用の徴証にさだめるようだ。たしかに五臣注の朝鮮正徳本は匡房詩とおなじ「万里途」に作る。しかし、李善注の旧を多くたもつ朝鮮宣徳本も「万里途」に作っている。じつに李善注本と五臣注本とは等しく「万里途」の本文を有していたと考えられ、佐藤の挙例は匡房使用の『文選』が五臣注本であつた論拠にならない。張衡賦についても李善注本が「睚眦跋扈」に作るというが、朝鮮宣徳本、朝鮮正徳本ともに「睚眦跋扈」につくり匡房の用字に合致する。やはり張衡賦該句も李善注本と五臣注本とに異同はないと思しい。佐藤は調査に使つた李善注本『文選』の版本を「通行本」というのみだが、おそらく胡刻本であろう。胡刻本

はたしかに「万里塗」と「睢盱拔扈」とに作っている。胡刻本は長らく李善注本の最善本とされてきたが、いま『文選』版本研究の到達点から見れば、胡刻本またその底本である南宋の尤刻本は、李善注本の原貌からはおく相当に問題の多いテキストといわねばならない。佐藤の誤解は、不用意にも胡刻本に依拠したことに起因すると思われる。佐藤論文の初出時、すでに尤刻本の問題を指摘した張月雲「宋刊文選李善单注本考」(『故宫學術季刊』第二卷第四期、一九八五年)が発表され、金学主「韓国古活字本『文選』の研究」(前掲)も訳出されていたが、岡村繁の前掲二論文は未刊であつたため、胡刻本の問題点は充分には浸透しなかつたのだろう。

(39) たとえば、武内義雄「正平版論語源流攷——本邦旧鈔本論語の二系統」(『武内義雄全集』第二卷、角川書店、一九七八年。初出一九三三年)は、明経博士家である清

五臣注『文選』刊本の系譜



原家の『論語』証本の三変を指摘する(四一六頁)。三変のうち、頼業(一一二二〜一一八九)と教隆(一一九〇〜一二六五)とが伝家の古鈔本を底本に宋刊本で校合する一変、頼元(一二八九〜一三六七)が宋刊本を本文に伝家の古鈔本を傍注にあつかう二変、この一変から二変への背景には中国刊本の流通の拡大があつた。

(40) 道長の時代は、このところ再検討のかまびすしい「国風文化」の絶頂期である。その代名詞ともいふべき『源氏物語』がいかに唐物に圍繞され成立しているか、河添房江『源氏物語時空論』(東京大学出版会、二〇〇五年)、同『源氏物語と東アジア世界』(日本放送出版協会、二〇〇七年)が明かしている。

(41) 平田昌司『孫子』——解答のない兵法』(岩波書店、二〇〇九年)八二〜八四頁。